

赤米ニュース

第290号

(2021年5月31日)



東京赤米研究会

〒186-0005 東京都国立市西3-7-29 アゼリア国立2-101 長沢方 (Tel.042-577-6855)

5月の赤米作り-----	2316
おしらせ-----	2318
おたより-----	2321
国分寺市の稲作農具（I）-----	長沢利明 2321
表紙解説：江戸東京ゆかりの植物⑤—タカオスミレ—	2322

[2021 年版赤米栽培マニュアル]

5月の赤米作り

●5月の赤米作りのポイント

風薫る5月の季節を迎えました。赤米作りも、いよいよ本格的なスタートとなります。みなさん、準備はよろしいですか？。今年もおおいに頑張って、たくさんのお米をあげましょう！。5月の赤米作りのポイントは、一言でいえばミニ田んぼの準備とそこへの種まき、そして発芽後の早苗の育成ということに尽きるでしょう。これさえ済ませてしまえば、もうあとはほとんど何もやることはありませんので、楽なものです。4月中に、ある程度の準備を済ませておけば、作業もぐっと楽になったはずですよ。

なお、ここでひとつ、お断りしておく必要がありますが、当会の赤米栽培マニュアルでは、あえて「種籾の直播き法」というやり方を採用しています。私たちは始めの頃、農家の方々と同じように「移植法」での赤米栽培をやっていました。「移植法」というのは通常の稲の栽培方法で、苗代に種をまき、それを本田に移植する（すなわち「田植え」をする）という方式です。そのやり方でも、もちろんかまわないのですが、数年間にわたる私たちの実験結果によりますと、バケツ・プランターを用いての小規模な赤米栽培の場合、その方式はあまりふさわしくないということがわかってきました。具体的にいいますと、移植過程での苗の成長のロスが非常に大きくて、後々までそれが響きます。そこで私たちは、移植法をやめ、直播き方式に切り替えることにし、今もそれを続けて良好な成果をあげているのです。

思い切って田植えそのものを廃止してしまった結果、作業もぐんと楽になりましたので、素人でも子供でも誰でも、簡単に赤米稲を育てることができるようになったことも、大きなメリットといえるでしょう。もともと赤米稲は「原始的」な稲なので、できるだけ素朴な育て方の方がよいということなのかもしれません。というわけで、ここではもっぱら「直播き法」での栽培法を、紹介していくことにします。移植法を用いて、大規模にやりたいという方々については、ぜひ農家の方々にアドバイスを仰いでいただきたいと思います。それではみなさん、さっそくやってみることにしましょう。

●種籾の用意

まずは種まきの準備から始めましょう。昨年に収穫して保存しておいた、もしくは今春新たに当会から届けられた、赤米の種籾の袋を開けてみて下さい。じっくりご覧になると、おわかりになるように、赤米というのは実に風変わりなお米です。通常の稲の籾のように、それは黄色い色ではなく、くすんだ濃い赤褐色をしています。また、籾の先端から何センチもの長さの、針のような毛が一本生えていることも変わっています。この毛のことを「芒（ノギ・ノゲ）」といいます。これらは古代米としての赤米の、大きな特徴なのです。いかにも原始的で野性的なその姿に、まずは注目してみてください（写真3）。

種まきに用いる種籾は、できるだけ新しいものを用いましょう。何年間も保存しておいた古い種籾でも、芽を出さないことはありませんが、発芽率はぐっと落ちます。全然、芽を出さないこともよくあります。去年、収穫したものをを使うのが、一番よいのです。長い

芒が邪魔で、互いにかからまりあって、うまく種まきができない時は、芒をハサミで切り落



写真3 赤米稲の種子



写真4 発芽した赤米稲

としてしまうとよいでしょう。一粒ずつ芒を切り落とすのは、なかなか面倒な作業ですが、バケツ・プランター栽培であれば量も少ないので、大した手間ではありません。芒を取り除くと、実にスムーズに種まきをすることができます。

●ミニ田んぼの用意

次にミニ田んぼを用意します。ポリバケツ・園芸用プランター・発泡スチロール箱など、何の容器でもかまいませんが、そこに土と肥料とを入れ、春のうちに一度耕しておくといよいことは、すでに前回述べておき

ました。なお、肥料について、もう少し補足説明しておきましょう。赤米稲の場合、無施肥でもよく育ちますが、あえて肥料を与えて多くの収穫をめざそうとする場合には、堆肥を用いるのがよいでしょう。ご自分で堆肥を作る場合、前年の秋に、山とか公園とかで落ち葉をかき集めてきて庭に積み上げておき、よく熟成させた堆肥を作っておくとよいのですが、市販の堆肥でももちろん結構です。容器の底の方に油粕を少し入れておいても効果的です。肥料はごく少量でよく、通常稲のように肥料漬けにはしてはいけません。

こうして準備のできたミニ田んぼには、たっぷり水をまいておきますが、前回説明しておいた通り、ジョウロでそっと水を注ぎます。そして、ここがポイントですが、田植え前の水田の苗代とは異なり、直播きをおこなうここでのミニ田んぼは、基本的に「湿った畑」状態を維持し、水をガブガブに満たしてはいけません。この点については十分注意が必要です。したがって、種籾は水中ではなく土の中にまかれる形になるわけです。水が多すぎると、まかれた種が浮いて流されてしまい、きれいに株をそろえることができません。

●ミニ田んぼへの種まき

こうしていよいよ種まきとなりますが、東京地方を例にとれば、4月下旬～5月上旬頃が種まきの適期となります。その時期までにミニ田んぼの準備を整えておいて下さい。多くの会員みなさんは、ゴールデンウィークの頃を種まきの目安にしています。連休中のお暇な時を選んで、やってみてはいかがでしょうか。

それではさっそく種をまいてみましょう。湿ったミニ田んぼの土の上に、指先を1cmく

らい押し込んで等間隔に穴をあけていき、その穴の中にひとつまみ5～6粒の赤米の種子を入れていきます(図2)。プランターの場合、穴の列を一直線に並べていくと、後できれいに苗が揃います。まいた種籾の上には土を少しかぶせて穴を埋め、上を指で軽く押さえて安定させます。次に、たつぷりとジョウロで散水しますが、まかれた水によって土が流れ、種籾が地表に露出するようではいけません。あくまでも「湿った畑」状態を維持して下さい。以後は散水を毎日続け、土の表面がかわいてしまうことがなく、つねに十分な湿気が土中に維持されるように気をつけて下さい。

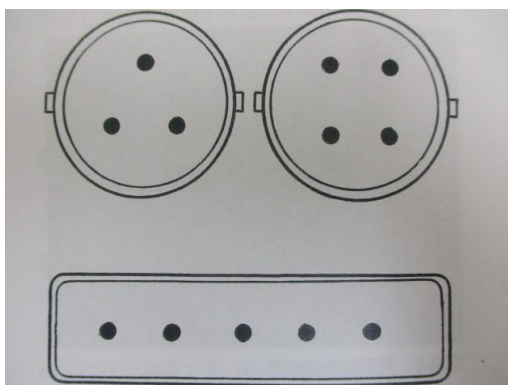
種まきの終わったミニ田んぼは、日当たりのよい所に置いておきますが、それは土の保温・保湿のためであって、種籾に日光をあてるためではありません。ミニ田んぼの地表面には、しばらくの間はあまり強い陽射しを当てない方がよく、バケツやプランターの上に段ボールなどをかぶせ、覆っておいてやりますと、日光をさえぎることができ、水分の蒸発を防いで、種籾の発芽を促進します。種籾は暗い所の方がよく発芽しますし、発芽直後の芽は実は強い陽射しが苦手なのです。さらにこの時期、スズメがよくやってきて、種籾をほじくり返し、食べられることもありますので、十分気をつけて下さい。

こうして発芽した苗がどんどん成長し、茎葉が青々としてきましたら、もう段ボールで覆わなくてもよいので、それをはずし、十分に直射日光を浴びさせてやりましょう。この段階になりましたら、もうこまめな散水は不要で、ミニ田んぼにはひたひたになるぐらいまで水を入れて下さい。もちろん苗が水没するほどの水位ではいけません。苗がどんどん伸び出して、高さ2～3cmほどになりま

したら、さらに水の量を増やし、ここで初めて土の表面が完全に水没しますが、水深はわずか0.5～1.0 cmぐらいが適切です。苗の草丈が5 cmほどに達した時点での水深は1～2 cmとし、しばらくの間その状態をキープしてい

図2 種のまき方の例

(上左図はバケツの3ヶ所まき、上右図はバケツの4ヶ所まき。下図はプランターを用いた場合で、いずれも上から見たところ。●の位置に5～6粒ずつ種子をまき、それぞれが1株となる)



きます(写真4)。

さあ、5月の赤米作りの作業はここまでです。この月はいろいろな作業が続き、結構大変で面倒でしたけれども、それも一時の辛抱で、これ以降は作業もぐっと楽になります。あまり手を抜くことなく、ぜひ頑張ってみて下さい。何かわからない点がありましたら、遠慮なく事務局までお問い合わせ下さい。

おしらせ

●第80回記念水彩連盟展



高橋寿子さんの作品「夢想曲」

本年3月31日(水)～4月12日(月)に、国立新美術館で第80回記念水彩連盟展が開催され、当会会員の高橋寿子さんの作品、「夢想曲」も出展されました。ハニーサックル・白ヒヤシンス・ヤグルマギク・ヨウシュヤマゴボウなどの花や実とともに、武蔵国分寺種赤米稲の赤い稲穂も描かれています(写真の左手)。青を基調とした幻想的な雰囲気の商品です。

●赤米セミナーの定例総会

赤米セミナーの今年度定例総会が、本年4月21日(水)に恋ヶ窪公民館にて開催されました。新入会員3名を含む10名ほどの



恋ヶ窪公民館の会議室で総会が開かれました



バケツへの土入れ作業もなされました

会員が集まりましたが、今回は恋ヶ窪公民館の隣にある国分寺市立第九小学校の矢島英明校長も、特別に出席されました。同校では今年度、4年生2クラスが総合の授業で赤米作りをおこなうことになっており、赤米セミナーがそのサポートをおこなうことになっているため、挨拶に見えられたとのこと。総会は①開会、②役員紹介(昨年度役員が全員留任)、③代表挨拶(大石岳人さん)、④議長選出、⑤新会員紹介、⑥審議議案(令和2年度活動報告および収支決算報告・同3年度活動計画および予算案・九小協力の件)、⑦挨拶、⑧閉会の順に進行し、終了後はバケツ15個分の土入れ作業がおこなわれました。なお、昨年度の活動報告と今年度活動計画案の内容は次の通りです。

[令和2年度赤米セミナー活動報告]

月日	活動内容
4/17	土作り(4名出席)。新型コロナウイルスによる緊急事態宣言につき公民館休館のため、屋外での作業を役員のみで行う。堆肥3袋使用。
5/16	会員自宅での栽培用に種籾を配布。
6/5	定例総会(9名出席)。新役員・新会員紹介・年間活動計画審議。公民館中庭のミニ田ん

	ぼ (バケツ) への種まき。
7/ ~	ミニ田んぼの水管理 (週2回)。全員交替で
8/	水やり当番。観察日誌記入・情報交換。
10/23	稲刈り (8名出席)。実った稲の穂刈り。バケツを片付け、土を九小へ戻す。
11/ 4	籾摺り (7名出席)。すり鉢・すりこぎによる籾摺り。
12/ 4	藁細ワークショップ (7名出席)。新しい藁を使って正月のしめ飾りを作る。できあがったしめ縄に飾りをつける。 (その後、新型コロナウイルスによる緊急事態宣言で活動中止となる)

[令和2年度赤米セミナーレ活動報告]

月日	活動内容
4/21	定例総会・土作り。会員と顔合わせをし、活動内容を協議。九小協力について打合せ。九小敷地内で土作りをし、堆肥を混ぜて種まきの準備。
5/	種まき。公民館中庭にてバケツ栽培開始。会員各家庭でもバケツ栽培開始。水やり当番を決める。
6/~	水管理。全員交替で水の管理。成長の状況を
8/	観察日誌に記入し、メールなどで互いに情報交換。
9/	稲刈り。実った稲を刈る。バケツ・土の片付けをする。
10/	脱穀・籾摺り。すり鉢・すりこぎで籾摺り。
11/	赤米試食会。今年収穫できた赤米を炊きあげ、感謝を込めて試食。赤米オリジナル料理を持ち寄る。
12/	藁細ワークショップ。新しい藁を使って正月のしめ飾りを作る。できあがったしめ縄に飾りをつける。
2/	事業計画および反省会。一年の活動を振り返り課題を協議する。ミニ新年会をおこなう。

なお、これを機会に赤米セミナーレの会則を以下に紹介しておきます。この会則は 2019 年 4 月 1 日より施行されております。

●赤米セミナーレ会則

第1条 本会の名称を赤米セミナーレと称する。

第2条 本会の事務所を代表宅に置く。

第3条 本会は、主に国分寺市在住、在勤する者を以て組織する。

第4条 本会は赤米 (武蔵国分寺種) の知識を深め、地域住民と共に栽培、情報交換をしながら、収穫、食の喜びを共有し、会員相互の親睦と地域活動の向上を図る事を目的とする。

第5条 ①本会運営のために、次の役員を置く。代表1名。事務局長1名。会計1名。監査1名。②各役員の仕事は次のとおりとする。代表は本会を代表して会を総括し、会議を招集し議長を決める。事務局長は代表を補佐し、代表事故ある時はこれを代行する。会計は、本会の会計を掌握する。監査は、本会の会計を監査する。

第6条 本会の会議は、年1回開かれる総会と、前記の役員による役員会とする。

第7条 本会の会議は、それぞれの定数の過半数の出席で成立する。

第8条 本会の運営は、会員から徴収する年500円の会費をもってあてる。

第9条 本会の会計年度は、毎年4月1日から翌年3月31日までとする。

第10条 この会則は、総会において、出席者の3分の2以上の承認があれば変更できる。

付則 この会則は平成31年4月1日から施行する。

おたより

●赤米セミナーの総会（富村隆子）

先日は、わざわざ種籾をお届けいただき、ありがとうございました。セミナーの今年度定例総会を、四月二十一日（水）の十四時より、恋ヶ窪公民館会議室にて開催致します。総会后、ミニ田んぼの土作りも予定して居ります。お時間がございましたら、お越し頂きたく、お願い申し上げます（4/6：東京都国分寺市）。

●九小で赤米栽培？（大石岳人）

恋ヶ窪公民館のお隣、第九小学校の校長先生より、地域交流で4年生の赤米作りのサポートをお願いされました。詳細はまだ未定ですが、2クラスでプランターで育てることになりそうです。つきましては、赤米の種もみをお願いしたいのと（なければ自分が用意します）、場合によっては教育講演的にお話をお願いするかもしれません。次の総会に、九小の校長先生も出席されるとの事ですので、その際に、詳しい打合せをさせていただければと思います。よろしくお願ひいたします（4/8：東京都国分寺市）。

国分寺市の稲作農具(Ⅰ)

長沢 利明

はじめに

東京都国分寺市において、かつておこなわれていた稲作農業では、どのような農具類が用いられてきたのであろうか。その実態をこ

こに少し取り上げてみることにしたい。「米」という字を分解すると「八十八」となり、八十八段階もの複雑な栽培過程・調製作業を経て、初めて米は食べられるものになるのだ、という教訓が古くから語られてきた。それほど手間暇をかけて、集約的にいとなまれるのが日本の稲作農業なのであるから、そこで用いられる農具は高度に機能分化が進み、きわめて多くの種類が生み出されている。国分寺市内の稲作農具の多様性にもまことに顕著なものがあり、とてもそのすべてを取り上げることなどできないが、代表的なもののみをいくつか選び、解説してみることにしよう。

周知のように、国分寺市内に伝えられた在来赤米稲の栽培を復活させるころろみが2015年に始まり、西元町の小坂長吉家がその試験栽培を最初に請け負うこととなった。筆者らは種まきから稲刈りに至るまで、同家での農作業を手伝いながら、農業技術の記録作業をおこない、並行して農機具調査も実施してきた。赤米稲の栽培はその後、2016年に西町の加藤太平家、2017年に北町の野中明家へと引き継がれ、2018年には西元町の小坂家へと再び戻ってきたが、筆者らの調査もまたそのつど少しはなされてきた。もちろん農作業の合間に、ついになされてきた簡単な調査であったから、成果も断片的なものにとどまっている。

一方、国分寺市ふるさと文化財課では、2016年から2020年にかけて市内総合文化財調査を実施することとなり、私たちも駆り出されるようになった。こちらは計画的に進められてきた大規模な調査であった。並木町の榎戸家、内藤の沖本家、戸倉の峰岸家、本多の本多家などで本格的な農具・民具の悉皆調査が連日、精力的になされてきたことが今、

思い起こされる。こうした一連の作業を通じ、市内の農具の総合的な調査がやっとなされるようになり、他市町村並みの本格的な記録保存作業が、国分寺市内でもようやく始まることとなった。とはいえずすでに遅く、すでに失われてしまったものも多かったが、かろうじて残されてきたものについては、少なくとも完全な記録がなされていかねばならない。こうして私たちは、農具や民具の実測作業や図面トレース作業などを2~3年続けてきたのであるが、この仕事を通じてできあがった実測図は、もうすでに何百枚もの量が蓄積されているし、農家への聞き取り調査からは膨大な記録データが得られている。今後は少しずつそれらをまとめ、成果を公表していつてみたいと筆者は考えている。

さて、稲作農業に用いられる農具は、その使用目的や作業分野から、次表に見るようにおおよそ五グループに分類することができる。各グループから代表的なものをいくつか選び、取り上げていつてみることにしよう。

表1 稲作の各作業分野と使用農具

作業分野	用いられるおもな農具
施肥作業	(施肥) クズハキカゴ・竹熊手・肥桶・柄杓・荷車・天秤棒など
耕起作業	(荒起し) 三本鍬・四本鍬・踏鍬・マンノウ・鋤・馬具・木槌など (苗代作り) 平鍬・熊手・トンボなど
植付作業	(播種) マンガ・ミソコシザル・レーキ・四斗樽・定規など (定植) 田舟・天秤棒など
育成作業	(除草) 除草機・アゼカキなど
収穫作業	(稲刈り) 鎌・コンバインなど (脱穀) カナゴギ・唐箕・くるり棒・

足踏み式脱穀機・動力式脱穀機など (乾燥) トンボ・レーキ・筵など (調製) カラウス・箕・石臼・米俵・ 棧俵・米櫃・藁槌など
--

1 施肥作業と農具

一年の稲作農業は、その年の春から始まるのではない。前年の秋、すなわち稲刈りの直後に次年度の稲作作業がもうスタートしている。水田であろうが陸田(畑)であろうが、耕地の荒起しを年内に一回はやっておかねばならないし、耕地内に残る稲の根株をざっくりと土ごと掘り起こして裏返しにし、土中にうずめておく必要がある。それがいわゆる「天地返し」という作業である。その時に用いられる重量級の平鍬・四本鍬は、北多摩地域ではよくマンノウとか備中鍬とか呼ばれているが、それについては次節の耕起作業のところで触れてみることにしよう。

そして、荒起しを済ませた後になされる冬場の重要な作業が堆肥作りであって、雑木林に降り積もった大量の枯葉を掻き集め、庭の堆肥置き場に積み上げて腐らせて、春までにそれを熟成させなければならない。(つづく)

【表紙解説】江戸東京ゆかりの植物⑤—タカスマレ—

高尾山は東京都民にとって、懐かしいふるさとの山だ。都内に生まれ育った者であれば誰でも、小~中学校時代に一度はこの山に登った経験があるはず。高尾山は「スマレの山」としてもよく知られ、計18種ものスマレの自生が確認されている。中でもその王者はこの山で発見された特産種、タカオスマレ(高尾藁)だ。ヒカゲスマレの変種として1928年に発表され、花期に葉の表面が焦げ茶色に染まる点が、ヒカゲスマレと異なっている。全山至る所に生え、特に1号研究路沿いに多いが、高尾山では特に珍しい植物ではない。